

## 「小式部内侍が大江山の歌の事」

- ・①丹後にいる母和泉式部のもとに使いの者を行かせる目的は？正解ウ

母である和泉式部が当時有名な歌人であり、娘である小式部内侍が歌合の歌人に選ばれたので、定頼は歌合での和歌の代作を丹後にいる母にお願いするため、使いを送っただろうと小式部内侍を侮ります。小式部内侍に「(母のいる)丹後から使者が戻ってきたか」とふざけて声をかけ、部屋の前を通り過ぎようとしてしました。次の説話でもあるように、左右に分かれて和歌の優劣を競い合う歌合は、歌人のプライドをかけた戦いの場でした。あらかじめ題が与えられ、その題で和歌を詠みます。

- ・②小式部内侍は母和泉式部のもとに使いの者を行かせていたのか？正解イ

小式部内侍が詠んだ和歌が定頼からかけられた言葉の答えになっています。

和歌の掛詞（「生野」と「行く」、「踏み」と「文」）がポイントです。

和歌の訳は「大江山、**生野**というところを通って**行く**、丹後への道は遠いので、まだ**天橋立**を訪れたことはございません。そのように、母のいる丹後は遠いので、まだ**便り**もございません。」となります。「文」が「手紙」の意味で、丹後を訪れたことはなく、母の助けを借りるような手紙は受け取っていないことを伝えています。「天橋立」は和歌でよく詠まれる地名「歌枕（うたまくら）」の一つです。さらに「橋」と「踏む」が縁語（えんご）となっています。掛詞と縁語は語が重なっていることが多いです。縁語は関連のある語を和歌のなかであえて用いることを言います。縁語の例は「火」と「焼く」「燃ゆ」等。即興で技巧を凝（こ）らした歌を詠んでいます。

※「遠けれ（形容詞の已然形）+ば（接続助詞）」で、訳は「遠いので」。

「ば」の前が「未然形」か「已然形」かで、訳が異なるので要注意。

- ・③定頼が小式部内侍のもとから逃げたのはなぜ？正解イ

本来は小式部内侍の和歌に何かしら返すのが礼儀ですが、あまりのすばらしさに驚き、定頼は返歌できずに、逃げてしまいます。

- ・文法クイズ①「とられて」の「れ」正解ウ（受身）

小式部内侍は歌合の詠み手として選ばれました！

- ・文法クイズ②「過ぎられけるを」の「られ」正解エ（尊敬）

本文「逃げられにけり」の「られ」も尊敬。どちらも定頼が主語です。

・文法クイズ③正解ウ（已然形）

「こそ」は「強意」の係助詞。「こそ」が文中にあると、文末が終止形でなく、「已然形に」なるので、注意しましょう。「こそ」があるので、過去の助動詞「き」が「已然形」の「しか」になっています。同じ「強意」の係助詞でも「ぞ」「なむ」が文中にある場合は、文末が連体形になります。

・文法クイズ④「ものや思ふと」の「や」の意味は？ 正解ア（疑問）

係助詞「や」は「疑問」と「反語」で用います。「ものや思ふとひとの間ふまで」とあり、「問ふ」と続いているのが手がかりになります。「もの思いをしているのかと人が尋（たず）ねるほどに」という訳になります。係助詞「や」「か」はどちらも「疑問」「反語」で用います。「やは」「かは」のように「は」がついている場合には反語であることが多いです。係助詞「や」「か」や疑問・反語の副詞が文中にある場合には、文末は「連体形」になります。

・文法クイズ⑤助動詞「き」の連体形は？ 正解ア（し）

過ぎ去りし日々（過ぎ去った日々）など、「き」の連体形はよく使います。本文でも「あさましくおぼえしより」の「し」など。ほかにも探してみよう！

・文法クイズ⑥助動詞「き」の特徴は？ 正解イ（経験過去の助動詞）

「ア 伝聞過去もしくは、詠嘆の意味で用いる助動詞」が「けり」です。

・単語クイズ①「みまかる」の意味は？ 正解イ（死ぬ）

※忠見はどのような人物？

みなさんは、これだけは譲れないというものありますか？忠見にとってそれは和歌このお話は、和歌に命をかけた男のストーリー。古文では「すきもの」という語があります。恋愛に熱中する人（色好み、プレーボーイ）を表す場合と、今回のように「和歌に熱中する人物」を表すことがあります。この話は、まさに「すきもの伝説！」以下、みなさんからの答えを紹介します。忠見の父も優れた歌人！和歌の家に生まれ、和歌を愛した忠見のエピソードです。

- ・平安時代中期の歌人。三十六歌仙の一人。忠岑（ただみね）の子。官位は低かったが、繊細清新な歌風で『拾遺和歌集』などに入集。
- ・父・忠岑とともに三十六歌仙の一人に数えられる人。
- ・壬生忠見という、平安時代中期の歌人。『古今集』の撰者忠岑の子。
- ・歌人として活躍した人物

- ・平安時代に栄華を誇った村上天皇の時代に活躍した歌人
- ・平安時代中期の歌人。古今集の撰者忠岑の子。歌に執着しすぎたために兼盛を上回るほどの歌が作れなかったことを気に病んで死んでしまった。
- ・兼盛と恋の歌で競ったが負けてしまい落胆のあまり食欲を失い病気になり死んだ人物
- ・歌にとっても熱心で執着心がある。
- ・自分をどんどん追い込んだり、一つのことに深く思い悩んでしまう人。
- ・歌に負けて食欲がなくなるほど、歌に一生懸命な人物
- ・天徳の御歌合で兼盛に歌で敗れた
- ・プライドが高い人であった。
- ・歌詠みに人生をかけていた人物。
- ・歌を命と同じほどに大事にしている人
- ・歌詠みで兼盛に負けてしまったが、兼盛とほぼ同等の手腕を持つ。
- ・兼盛に歌合わせで負けた人物。自信家(?)
- ・執念の強い人物
- ・歌人で歌合のときに兼盛に惜しくも負けてしまった人。1つのことに熱中するような人だと思う。
- ・心がとても動かされやすい人物
- ・敏感な人
- ・兼盛に負けてしまい不食の病にかかってしまったので、忠見は負けず嫌いな人物だと思う。
- ・物事に深くとらわれる心を持つ人
- ・歌に全てを注いでいて、物事に深くとらわれる人
- ・和歌に自分の人生をささげている人
- ・歌合に命を懸けている人物
- ・非常に和歌に熱心で、歌合に全力を注ぐような人
- ・感受性がとても豊かであり、歌に情熱的であった。
- ・命を失うほど熱心に和歌に取り組んでいた。歌に執着を持っていた
- ・自分に起きた出来事に深く心をとらわれる人物である。また、歌に執心（執着）があり、歌を自分の中で一番大切にしている人物。
- ・歌の道に最期まで熱心に執着できる人物
- ・歌の道に執着しすぎて死んでしまったので、歌に対する熱量がものすごい人

- ・歌への執着心が強かった人物
- ・歌を詠むことにとっても強い思いがあり、感情の激しい人
- ・心が弱いようにも見えるが、歌にかける思いや執念が驚くほど大きい
- ・物事に深くとらわれ、歌を深く心にかける習慣
- ・歌合に負けて、病にかかって亡くなってしまったので、きっと豆腐メンタルの持ち主
- ・歌に対するプライドが高い人物
- ・とても負けず嫌いでありながらも、自身の敗北を認めることができる **True Warrior** であるといえる。
- ・感受性が極めて豊か？
- ・ナイーブで歌詠みに命を懸けていた一生懸命な人。
- ・歌を深く愛し固執している人物
- ・歌に対して真剣
- ・和歌の才能があり、和歌への思いが人よりも強い人。
- ・和歌をつくる才能があり、人よりも和歌への想いが強い人物。
- ・平兼盛との歌の勝負に敗れたので、それに悩み病死したといわれている。
- ・歌を読むことに対する熱がとともある人。さらに相手の実力を認めつつ、自分がそれほど素晴らしいものを詠めず、悔しく思うことが出来るストイックな人。
- ・ピュアボーイ
- ・負けず嫌いで、負けたことを情けなくとても悔しく思っている。
- ・歌を読むことに深くとらわれていた。